慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佐藤先生と私
Sub Title	
Author	二宮, 孝顯(Ninomiya, Takaaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.336- 338
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0336

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は控え目だった酒も相当行けるようになり、飲んで乱れず、つき合いもよい。

この朔さんが、今度還暦だという。同じ時代を数十年、つかず離れず共に過してきた私の感慨はまことに深く、文字通り先輩であり畏友である朔さんの健康を心から祝福してやまない。

佐藤先生と私

二宮孝顯

私が文学部の予科へはいったころ、三田通りの福島屋書店に、「仏蘭西文学その他」という雑誌が置いてあった。これは、塾のフランス文学科の先生と学生が執筆している月刊誌で、新らしい作家の作品と評論の紹介が多く、われわれ新入生にとっては新鮮な魅力があった。内容についての記憶はもう薄れているが、ただ、最も活躍していたのが佐藤朔さんであるという印象は忘れられない。朔さんもペン・ネームであったが、そのほかにも別名を使ってたくさんの記事を書いていられるのが、なんとなしにわれわれにもわかった。

仏文科へはいって早くこの雑誌に書かせてもらいたいと念願していたが、私が本科へ進んだ時には、どういう事情

いま、慶応の仏文といえば、各大学を通じて最も異彩ある存在の一つとなった。朔さんが育てた若い人達のすぐれた業績もさることながら、そのきっかけは朔さんがつくったのだということを、いつまでも忘れまい。

最後にも一度、思い出の一句を云はして貰う。

Enfin, Malherbe vint...

かしらないが、「仏蘭西文学その他」は廃刊になっていた。佐藤さんはもう卒業して、学校の先生になっていられた筈である。佐藤さんと私とはだいぶ学年のへだたりがあるので、もちろん面識はなかったが、そのころの仏文科の学生数は少く、新学期には、三田フランス文学会が新人生の歓迎会を開いてくれたものである。その席には、広瀬、後藤両先生をはじめ、塾内の諸先生や、松原秀治氏、青柳瑞穂氏などの先輩たちが並び、われわれ新入生は末席から、先生方のお顔を拝見したり、お話を拝聴した。場所はたしか日比谷の山水楼で、出席者は学生をふくめても二十五名くらいだったようにおぼえている。

佐藤さんはそのころ、コクトオの飜訳などを出版されており、すでに三田の新進フランス文学者で、厚生閣から出ている「詩と詩論」などによく執筆されていた。われわれ後輩からみると、佐藤さんは秀才の高峰のような存在であった。また、当時は佐藤さんの周辺にいろいろな才能をもった方々がおられ、仏文科では、田中千禾夫氏、原研吉氏、芦原英了氏など、英文科では、厨川文夫氏、滝口修造氏、樋口勝彦氏など西脇先生門下の逸材が揃っていた。これらの方々の姿は、三田山上や三田通りの喫茶店で時折見かけたものである。

私は仏文科に進んだが、予科のころから「三田文学」に戯曲や小説を発表し、私自身は初めから作家志望ではなかったが、創作をする人たちと交っていたので、佐藤さんと個人的におつき合い願ったのは、卒業後、「三田文学」でフランス文学特輯号を出した時である。当時青山に住んでいられた佐藤さんをお訪ねし、いろいろと教えていただいた。

その後私はフランスへ留学し、帰国して日吉へ出講したころには、佐藤さんは病気をされていて、おめにかかることは少なかった。戦争も次第にはげしくなり、私はN・H・Kの国際局をやめて、塾の語学研究所に奉職した時、佐藤さんも病後同じ研究所にはいられたので、親しくお会いできる機会が多くなった。慶応義塾では戦争中も研究発表

がつづけられ、時々警戒警報のサイレンがなるなかで、ランボウの詩に関する佐藤さんの研究発表をきいた記憶がある。

塾は遂に戦災にあい、私も家を焼かれて暫らく郷里に帰っていたころ、佐藤さんも奥さんと子供さんを連れて同じ新潟県に疎開され、私を訪ねてきてくださったことがある。思いがけぬ時、思いがけぬ所でお会いできた嬉しさは、戦時中であるだけに格別であった。汽車に乗るのも困難であったし、いつまたお目にかかれるかわからぬような戦争末期のことである。

戦争が終り、いよいよ学校の授業が始まった時、私が三ノ橋の予科で教えるようになったのは、青木予科長のご好意と佐藤さんのお力添えによるものである。上京するようにとの電報を受取り、私は再出発の決意をした。

その後、今日まで公私ともお世話になるばかりで、報いること少いのは慙愧にたえないが、佐藤さんが還暦を迎えられるにあたり、いささか過去をかえりみ、感謝の念を新らたにした。これからも、ますます活躍されるようにお祈りする。

S・S氏

堀田善衛

S・S氏のことを、あわてて書かねばならぬとは、これは悲しいことである。あわてて書くのでないのであれば、言うまでもなく、S・S氏などということではなくて書いたであろう。けれども、S・S氏について書くということ